

1. はじめに

本稿はイラン短期研修代替・周辺国理解促進プログラムに参加し、2026年2月2日から9日にかけて実施されたマスカット（オマーン）およびカタール（ドーハ）での研修、ならびに SIR（イラン国際関係学院）学生訪日プログラムを通じて得た知見を報告するものである。本研修を通じて、筆者が向き合うことになったのは、中東、とりわけイランを、誰の視点から語るのかという問いであった。外側から与えられるイメージと内側から語られる声。その間に存在する距離を、いかに理解し、いかに伝えるのか。本稿はその模索の過程でもある。

筆者は英文学を専攻し、第二次世界大戦の分断社会における文学の役割を主軸に学んできた。文学のみならず、関心の主軸に長年あったのは、中東と紛争とジャーナリズムである。英文学を学んだ後に戦地で報道を続けた山本美香氏に触発され、文学を基盤とした視点から中東および紛争における人間を学ぶ道を選んだ。戦争や紛争は、国単位で語られがちだが、最も根底にある人間の姿に興味を尽きなかった。大学三年次には、アイルランドでジャーナリズムを専攻し、紛争に対する知見を深めた。こうした背景から、中東の要衝であり重層的な文化を有するイラン、および女性の権利の在り方は筆者にとって大きな関心事であり、本研修への応募契機となった。

2. ジャーナリズム：声なき声を聴くこと

最も強く印象に残っているのは、ドーハに本部を置くアルジャジーラの視察とアルジャジーラフォーラムへの参加である。生放送の緊迫感や最新鋭の報道体制を目の当たりにしたことは、他に代えがたい刺激となった。フォーラムでは、パレスチナ問題や米国の外交政策を巡り、当事者や各国の要人、ジャーナリスト等が意見を述べる場だった。しかし、実際、ある質問者が、定型句ばかりの回答に呆れ、会場を静かに去っていく姿も見られた。

特に印象深いのは、同局の女性ジャーナリストとの対話である。彼女は、完全に中立なメディアは存在しないと前置きした上で、「既存メディアが軽視する弱者の声を拾う公平性」を強調した。紛争地においては「数値よりも human story（人間の物語）を重視する姿勢」と述べた。これらは、筆者が理想とする報道の在り方と共鳴した。また、紛争地取材に伴う自己責任論やリスクについて尋ねた際、彼女は自身の紛争地での取材経験や、そういった取材には訓練が当たり前であること、紛争地を取材しなかったら誰が伝えるのかと述べた。そして、「それでも取材してしまうのがジャーナリストである。」という言葉は、ガザで殉職した同局記者のパネルが掲げられた会場の厳粛な空気とともに、深く胸に刻まれた。

3. 中東情勢の重層的な理解

ジョージタウン大学カタール校のメフラン・カムラヴァ教授による講義では、中東における内戦と対立のメカニズムを学んだ。「アラブの春」以降のイエメンやリビア、シリアの事例を通じ、内戦が単なる武力衝突ではなく、外部勢力の介入や「アイデンティティ・アントレプレナー」による宗教的対立（Sectarianism）の煽動によって長期化する構造を理解した。

教授は、現在のイランの外交政策が宗派対立以上に「戦略的競争（Strategic Competition）」に基づいていると指摘し、宗教的レトリックは動機ではなく正当化の手段として機能している側面を強調された。北アイルランド問題を学んだ経験と照らし合わせると、宗教的言説はしばしば政治的動員の手段として用いられる点で共通している。

4. 文化とアイデンティティ

オマーンのスルタン・カブース大学での学生間交流では、女性の伝統衣装が単なる装いではなく、グローバルな流行に抗い固有の文化を保持する「アイデンティティの盾」としての役割を果たしていることを学んだ。また、オマーン国立博物館の展示構成からは、海洋国家としての歴史や伝統を最優先する確固たるナショナル・アイデンティティが見て取れた。

ドーハにあるイスラム美術館も本研修で最も印象深かった訪問先の一つである。イスラムフォビアという言葉があるように、イスラム教に対するネガティブなイメージは日本でもよく見られる。しかし、武器、美術など多様な分野と広範な範囲を網羅した展示を見て、イスラム教の歴史的な重みと精神的な美しさを垣間見た。ネガティブなイメージばかりが流布する社会において、語られない美しさに焦点を当てることは、今求められることではないだろうか。

研修前まで、イランにおいてヒジャブが選択ではなく義務を強制することから、ヒジャブを女性の権利を抑圧する象徴だと思っていた。しかし、アルジャジーラ研究センターで、ファティマ氏との対話を通じ、イラン映画におけるヒジャブの流行が新たなファッションや自己表現の形を生み出したという文脈を知った。信仰や国の文化、アイデンティティを表現する役割があることを肌で感じた。ヒジャブ着用義務化から生まれる人権の侵害には無論反対の立場だが、自身の価値観のみを尺度とせず、相手の文化的文脈を尊重し、背景にある多様な意味を汲み取ることの重要性を深く学んだ。

5. イランについて：立場が変われば違う景色が見える

「イランを外側から研究することは不可能である。」

これはファティマ氏の発言である。彼女はイランを専門とする研究者であり、その言葉には重みがあった。本研修では、「中東から見たイラン」や「イラン人学生が語る自国」を捉えることができ、非常に大きな学びとなった。ある SIR 学生との交流で、「忘却や許しをしないことが、将来国を守ることに繋がる」という言葉は、「憎しみは憎しみを生む」と教育を受けてきた筆者にとって衝撃的で、外交官候補生としての発言の背景にある重みを身に染みて感じた。また、抗議デモに対する体制側としての彼の意見なども聞いて、イラン全体の意見ではないにせよ、一人のイラン国民の考えであるため、その背景にある社会や立場、歴史を考える重要なきっかけとなった。

こうした自分とは違った論理に触れることは、物理的な距離や政治的な立場の違いを超えて、いかに当事者性を持ち得るかという問いを筆者に突きつけた。

研修の最終日、東京の大雪や解散総選挙の開票といった大きなニュースをバスの中で読み、「日本が遠い国に感じる」と寂しさを覚えた。すると、同行学生から「中東から見た日本がいかに遠い存在かってことだよね」という指摘を受け、ハッとした。無意識のうちに日本を軸に社会を見ていたが、中東から日本を見つめなおすことで、視点の相対化が起きた。物理的な距離よりも、当事者ではないことが、「遠さ」を感じさせるのかもしれない。ここでファティマ氏の発言の真髓が見えた気がした。複雑なことは複雑なまま理解しなければいけないという姿勢を堅持しながら、一番近い「イランの中で」見てみたいという渴望もより深まった。

6. 将来への展望と社会への還元

在オマーン日本大使館や企業の訪問を通じ、日本と中東がエネルギー資源のみならず、技術や文化交流においても深い協力関係にあることを実感した。本研修での経験は、筆者の学問的関心とキャリア形成における強力な指針となった。本研修を通じて明確になったのは、人と人の間に横たわる誤解や距離を縮めたいという根源的な動機である。筆者は、数値や西洋からの視点で語られる中東像に違和感を抱いてきた。今後は、文学・映像・対話といった複数の手段を用いながら、複雑なものを単純化せず伝える姿勢を持ち、日本と中東の間を往還しながら、発信していく人材になりたい。

7. おわりに：人類は一つの体である

SIR 学生との交流では、国際関係やジェンダー観といった議論のみならず、同世代の女性として美容や生活の話で共感し合う場面も多く、心理的距離が払拭された。こうした草の根の共感こそが、深い対話の土台となると確信している。

最後に、SIR 学生からお土産でいただいた、ペルシャ詩人サアディーの『ゴレスターン（薔薇園）』の一節を引用し、結びとしたい。

「人類は一つの体であり、もし体の一部が痛めば、他の部位も安らぐことはない。他者の苦しみに痛みを感じないならば、人間に値しない。」

この言葉を胸に、緊迫する国際社会において、特に中東という地域を軸に「伝える」という役目を果たすべく、研磨することをここに決意する。

末筆ながら、突然のイラン情勢悪化に関わらず、代替プログラムを実施して下さった笹川平和財団の皆様をはじめ、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

(なお、本所感は執筆者個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものではありません。)